

Ⅲ-12 「コラム」 細見、そして再検討 —湯舟坂2号墳細見展から—

森島 康雄

1. はじめに

京都府立丹後郷土資料館では、2021年度（令和3年度）に企画展「黄金の大刀発掘40年 湯舟坂2号墳細見」を開催しました。展覧会を企画していた2020年（令和2）5月に、京都府立大学から地域貢献型研究（ACTR）「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」の湯舟坂2号墳プロジェクトへの協力依頼がありました。湯舟坂2号墳の出土遺物は重要文化財に指定されていて、丹後郷土資料館が保管しているからです。研究に参画することでその成果を企画展に反映することができますので、資料館にとってもありがたいことでした。

企画展は2021年4月24日から6月13日までの予定で開始しましたが、4月25日から5月末まで新型コロナ対策の緊急事態宣言による臨時休館となってしまいました。会期は6月20日まで1週間延長しましたが、わずか19日間しか開催できなかったのは残念なことでした。

2. 湯舟坂2号墳の価値

湯舟坂2号墳と言えば、多くの人は黄金に輝く環頭大刀を思い浮かべることでしょう。丹後郷土資料館でも、特別展や企画展のほかにも特別陳列の機会を設けて毎年のように環頭大刀を展示してきました。たしかに、この金銅装双龍環頭大刀は、国内出土の装飾大刀を代表するもののひとつで、丹後、特に久美浜の皆さんが誇るべき地元の宝です。しかしながら、湯舟坂2号墳の価値は、この黄金の大刀が出土したことにとどまりません。

湯舟坂2号墳には大量の副葬品が盗掘の被害を受けずに残っていました。墓として使われなくなってからあまり時間が経たないうちに石室に流れ込んだ土で埋まってしまったためです。また、流れ込んだ土が粘土質であったために、金属の錆や微生物による分解が進みにくい環境であったようです。木や布などの腐りやすいものはほとんど失われていましたが、鉄の刀や矢じりなどは錆びてはいても原形をとどめて出土しました。環頭大刀が黄金に輝いていたのもこの環境のおかげでしょう。このように、最後の追葬が行われた時の状態が良く保たれていたところこそが、単に環頭大刀が出土したことにとどまらない湯舟坂2号墳の大きな価値なのです。

そこで、2021年度の企画展では、大量に副葬されていた須恵器、鉄刀などの武器、馬具や鞍などの武具などを含めて、重要文化財に指定された出土品の全貌を、それらが出土した状況を反映する形で展示することを心掛けました。

3. 細見、そして再検討

企画展のタイトルに入れた「細見」という言葉には、ふたつの意味を込めました。

ひとつ目は、副葬品を細かく見るということです。肉眼や手触りといった通常の観察を細か

く行うことで、須恵器に使用痕がなく、窯で焼かれた時に割れた破断面が鋭利なまま残っていることがわかりました。副葬品の須恵器は被葬者が生前に使用していたものではなく、葬儀用に手に入れた未使用品らしい。つまりは、須恵器の生産時期≒埋葬時期とみてよさそうです。

ACTRの一環で奈良文化財研究所の栗山雅夫氏が2億画素のカメラで撮影した精細なデジタル写真も大きな力を発揮しました。大刀に打たれた鑿の痕跡、鞍金具の内面に残る布の織り方などなど、肉眼では見えない細部までが一目瞭然で、工人の息遣いが聞こえるようです。これらの写真は、展示室に設置した大型の4Kディスプレイで観察できるようにしました。

「細見」のふたつ目の意味は、副葬品の出土状況からどのような情報が引き出せるのかを細かく見てみようということです。湯舟坂2号墳の大きな価値である、最後に追葬が行われた状態が良く保たれていることに注目するのです。湯舟坂2号墳に副葬された土器の年代には100年程度の時間幅があり、この間に複数回の追葬が行われたと考えられます。古い形の土器は奥壁近くで固まって出土し、新しい形の土器は石室の中ほどから入口近くまでの広い範囲で出土しました。追葬する空間を確保するために、先に埋葬された人への副葬品を片付け、追葬時の副葬品を置いた結果です。

展示に際しては、例えば、須恵器については、奥壁付近に片付けられたものを奥側の1段高い展示台に、追葬時の副葬品を手前の低い展示台に並べることで、型式の違いや器種構成の違いがひと目で理解できるようにしました。武器・武具・馬具についても同様に配列を変えることで、早い段階に埋葬された被葬者が、金銅装や銀装、貝装などの豪華なものを持ち、武威を輝かせた人物であったことを浮かび上がらせることができました。

このように展示品の配列を検討するなかで、発掘調査の報告書で最も古いとされている一群の須恵器を、追葬時の副葬品としました。報告書とは異なる評価を提示したわけです。これらの須恵器は確かに古い形に見えるのですが、出土した状況からは追葬時の副葬品としか考えられないからです。これらの須恵器の時期をどう見るかは、湯舟坂2号墳の築造された時期、ひいては環頭大刀の作られた時期をどう見るかにもかかわってきます。今後の研究の深化に期待したいと思います。

4. おわりに—新たな価値の発見

湯舟坂2号墳の「黄金の大刀が出た古墳」だけではない新たな価値・魅力を提起したい。そのように思って、これまでも「丹後最古の仏教遺跡としての湯舟坂2号墳」という視点での特別陳列などを行ってきました。今回の企画展でも、奥壁付近に片付けられた古い仏具と追葬時に副葬された新しい仏具を上下2段に分けて陳列することで、被葬者たちが、継続的に仏教儀礼を採り入れていたことを示しました。

湯舟坂2号墳に限らず、発掘調査は掘って報告書を出して終わりではありません。機会あるごとに再検討を繰り返すことで新たな発見があり、遺跡や遺物の評価が深まってゆくものです。こうして新たな価値を見つけていくことが、ACTRのテーマである「文化遺産の地域資源化」につながるひとつの方法ではないかと思います。

なお、上記の検討課題について、詳しくは、『丹後郷土資料館調査だより』第11号 (http://www.kyoto-be.ne.jp/tango-m/cms/?page_id=74) をご覧ください。

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2